

第8回教育課程企画特別部会の発言追加

学校法人東明館中学高等学校理事長・校長

神野 元基

学校法人東明館の神野元基です。

「AGIの到来と教育の再設計」というテーマのもと、いま私たちが直面している技術的・社会的な変化に対して、教育がどのように応答し、次世代にどのような学びを託していくべきかについて、現場からの視点と国際的な潮流を踏まえて、当日の発言の補足をさせていただきます。

冒頭にご紹介したいのは、未来学者レイ・カーツワイル氏の予測です。彼は、「2030年を待たずして、汎用人工知能（AGI）が実現する」と述べています。AGIとは、大学院レベルのあらゆる知的課題をこなす存在であり、CEOレベルの経営判断すら代替できるとされます。つまり、ほんの数年後には、AIが人間と同等の知能を持ち、社会のあらゆる領域に本格的に関与してくるという未来が、もはや空想ではなく現実的なシナリオとして存在しているのです。

こうした時代において、教育が果たすべき役割は極めて大きいと考えています。AIと共に生き、AIと協働できる力を育むこと。単にAIを使える子どもを育てるのではなく、AIと共に創造できる人間を育てることが、私たち教育者の使命であると確信しています。

そのための取り組みとして、2つの視点からお話をさせていただきます。

まず1点目は、国際的なフレームワークを踏まえた学びの構造の再設計です。

ユネスコが策定した「AIコンピテンシーフレームワーク」では、生徒向けに「人間中心のマインドセット」「AIの倫理」「AI技術と応用」「AIシステム設計」の4領域における12の能力を示し、それぞれを「理解 → 応用 → 創造」の3段階で習得する構成をとっています。

教師向けにも、AIペダゴジーや専門性の開発を含む5領域15項目が示されており、教員が段階的にリスキリングを進められる実践的な基盤となっています。

またOECDでは、AIリテラシーを教科横断的に育む枠組みを提案しており、2029年のPISAにおけるAIリテラシー評価の導入も進んでいます。

たとえば：

- ・ 数学では、統計や確率を通じてAIモデルの動作原理を理解する。
- ・ 社会科では、AIによる情報生成の信頼性や、社会的・倫理的影響を議論する。
- ・ 情報科では、機械学習の訓練や設計における倫理的視点を育てる。

これからの教育は、「AIを操作するスキル」だけでなく、「AIと共に考える姿勢」と「AIを批判的に評価できる知性」を育むことが求められています。

2点目は、AIとの協働を前提とした学びのデザインと、現場における実践事例です。

私たちの学校では、AIを「思考の壁打ち相手」として位置づけ、様々な教科で活用を進めています。

たとえば歴史の授業では、生徒がAIに「坂本龍馬になりきって」もらい、その人物視点でインタビューを行うという学習を行っています。生徒はその対話を通して「本当に正しいのか」「別の見方はないか」と問いを深め、さらなる探究へとつなげています。

美術の授業では、生徒がAIを活用して自らのイメージをもとにラフスケッチを生成し、その作品を起点として構図・色彩・技法を学ぶ「逆算型の創作」に取り組んでいます。これは表現が苦手な生徒にも“つくる楽しさ”から入る良い入口となっています。

情報科では、生徒が自作コードをAIに評価させ、その改善提案に対して「なぜこの修正が必要なのか」と再質問するという、まさにAIと対話するメタ認知型学習を実現しています。

こうした取り組みに共通しているのは、「AIを使う」ことそのものよりも、「AIとどう対話し、どう共に思考し、創造していくか」という姿勢を中心に据えている点です。

AIは、もはや単なるツールにとどまらず、教育の現場において共に学習を支える存在になりつつあります。実際、AIの導入によって、従来の教師と生徒の関係は「教師-AI-生徒」という三者の協働関係へと変容しつつあると指摘されています。この変化の中で、教師は知識の唯一の伝達者ではなく、AIと協力しながら生徒の学びを設計するファシリテーターへと役割をシフトし、生徒

にとってもAIは、単に答えを教えてくれる機械ではなく、自分の考えを試し、対話し、発見へ導く知的な相棒となっているのです。

一部の専門家は、人間がAGIを自らの「拡張知性」として活用することで、人間の創造性・倫理観・社会性をより深く育めると指摘しています。言い換えれば、AIを敵視するのでも、過信するのでもなく、人間の知性を拡張する存在として積極的に取り入れることで、新たな学びの可能性が開けるというビジョンです。

例えば、AIの得意とするデータ分析や知識検索の能力を活用しつつ、人間ならではの価値判断や創意工夫を組み合わせれば、これまで解決が難しかった複雑な課題にも取り組むことができます。AIとの協働により、生徒一人ひとりが自分のペースで深く学び、さらに他者と創造的に協働できる学習環境を築いていけると期待されます。それは、単なる学習効率の向上ではなく、人間としての成長や関係性の中での学びをより一層促すものになるはずです。

もちろん、AIと協働するためには、信頼の醸成と明確な役割分担が必要です。AIには得意不得意があり、倫理的判断や創造的意志決定の部分は、人間が担わなければなりません。一方で、反復練習や知識提示などはAIに任せることで、教師はより創造的で対人的な指導に集中することができます。

要は、人間とAIの強みを補完し合う“協働チーム”を教室内に築くことが、これからの教育に求められているのではないのでしょうか。

こうした未来の学びを制度的に支えるための3つの政策提言を申し上げます。

第一に、対話によって協働するためのAIコンピテンシーの育成です。従来のICTツールは「指示すれば実行する」一方向の存在でしたが、生成AIは対話を通じて理解を深め、出力を調整しながら協働的に発展する存在です。AIと共創できる人材と、そうでない人材とでは、将来の選択肢に大きな格差が生まれることが危惧されます。すべての子どもが、AIと協働しながら創造的に生きる力を育めるよう、倫理・リスク・スキル・態度を統合したAIコンピテンシーの体系的育成が求められます。

第二に、新たなデジタル学習基盤の整備です——「協働者としてのAI」を前提に。AIが学習の伴走者となることで、生徒はAIとの対話を通じて、学びの進め方そのものを柔軟に設計できるようになります。従来の「順序どおりに

学ぶ」から、「興味関心を起点に設計する」へと学びは変わりつつあります。たとえば、美術で先にAIに作品を生成させ、そのあとで技法を学ぶといった順序の逆転も可能です。こうした学びを支えるには、一人ひとりがAIと学ぶ環境を前提とした新しい学習基盤の構築が必要です。

教師にとっても、AIの強みを理解し、子どもの個別最適な学びを肯定的に捉えながら、伴走者として倫理や価値を育む役割が求められます。

第三に、学習指導要領を“予測不能な時代”に対応可能な構造にすることです。現在、教科書・カリキュラムの更新には年単位のタイムラグがありますが、AIやデジタル技術の変化はそれを遥かに上回る速度で進んでいます。特に情報リテラシーなど変化の速い分野については、短期スパンでの見直しを可能にする仕掛け、柔軟な単元構成や地域裁量の拡大が不可欠です。対応できる学校が一部にとどまらないよう、制度全体の設計見直しが必要だと考えます。

AGIの到来が目前に迫る今、私たちが果たすべき教育の本質的な使命は、「知識を教えること」ではなく、「未知に向き合い、自ら問い、他者と共に創造していける力を育むこと」であると、私は考えています。

教育とは、いつの時代も「人間が人間らしく未来と関わる力」を育む営みです。AIがいかに進化しようとも、その本質は変わりません。

だからこそ、今この瞬間から、教育界が技術の本質を見極め、世界と連携しながら、そして地域・学校・現場とともに、人間中心の社会を支える新たな学びの枠組みを築いていく責任があるのではないのでしょうか。